

序文に代えて

陶 徳 民

一九八六年関西大学着任の井上泰山先生が昨年三月をもって退休されました。そして、一九九〇年着任の内田慶市先生も今年三月をもって退休されます。「大家の風貌」と「大学問」を兼備するお二人の先生の「退休記念号」のために序文を書くと本誌の編集者の奥村佳代子先生と中国学専修の長谷部剛先生に依頼された際、さすがに「荷が重い」「手に余る」と感じました。ただ、お二人の先生の履歴書と業績書を拝見しながら、四半世紀にわたるお付き合いのなかで深く印象づけられたことどもが次第に思い出されました。ここにおいて、そのなかのいくつかを紹介し、お二人の先生のお人柄と学問の一端を伝えたいと思います。

私は一九九六年に着任しましたが、当時の中国文学科は言語・文学・思想の三分野で十四人の錚錚たるスタッフを擁する学科でありました。上海帰省の際に、母校復旦大学の周振鶴先生から、同大留学時代の内田先生が城隍廟付近の古本市場や福州路の古本屋で英華辞典類などを買い漁っていたという話を聞かされた時、中学校の時から上海の古本屋回りが大好きだった私は、内田先生を同好の仲間と見なしました。一九九七年秋、先生が翌年の在外研究先を探される時、私がハーバード大学PD時代に義務付けられた研究発表を司会して下さったことをきっかけに親しくなっ

た東アジア言語文明学部の中国思想史教授 Peter Bol 先生（当時は学部長、二〇一三年以降同大の副学長を務めており、復旦大・北京大・浙江大などとデジタル人文学を精力的に推進しておられる）を受け入れ担当の候補者として紹介しました。ハーバード滞在中の内田先生が、当時まだ極少なかった個人のホームページから現地の情報を頻繁に発信し、研究終了後は早くも二〇〇〇年に『ハーバード電腦日記——ミセス・バーバラとの出会い』（ミセス・バーバラは先生の寄宿先の大家さん）を上梓され、中国学の世界における初期のコンピューターの使い手として、同業者たちには大きな衝撃を与えました。その数年後、斯界における電腦達人のいわゆる「四天王」中の三人（内田先生、沈国威先生と二階堂善弘先生）が己の同僚であることを知り、本研究科一員としての誇りをより一層強めました。

内田先生が学究肌の方であられる一方で、行政手腕や国際交流にも長けたことは、学内外、国内外で歴任された数々の要職から窺うことができます（詳細はその略歴を参照）。そのなかでも特筆すべきは関西大学図書館長時代（二〇一二年十月—二〇一六年九月）以降、バチカン図書館、浙江大学・香港城市大学・カリフォルニア大学の図書館などと活発な国際交流と協働を展開させたことです。いうまでもなく、ネイティブ・スピーカー並みの自然な中国語会話能力や相手の立場や気持ちによく配慮する温かい人柄などが必須条件ではありますが、それらにも増して重要なファクターは、先生がグローバル化の時代に求められているオープンな姿勢と柔軟な頭脳の持ち主であることだと思われれます。館長就任後初めて『関西大学図書館フォーラム』に寄稿された巻頭言「私の夢見る図書館像——開かれた図書館を目指して」に次の一節があります。東アジア諸国の図書館は「知的所有権」意識と「知る権利」を守るモラルとのバランスをよく守っている欧米の代表的な図書館と比べた場合、相当遅れており、「コピー天国」は必ずしも中国や韓国の専売特許ではなく日本だってその傾向は昔からあるのだ。特に知的所有権についてはその意識は明らかに低い

と思われる。大切なものは人にはなるだけ見せず、他人のものは自分のものとして知らぬ顔。東西の図書館の根本的な違いはここに由来すると私は考えている」と。日本を含む東アジアの伝統観念における権利意識の欠如を忌憚なく批判する姿勢はここに鮮明に表れていると思います。

批判だけでなく、欧米並みのバランス感覚をもって可能な限り現状の改善と一歩前進を図るご努力の一例をここに挙げておきたいと思います。内藤湖南の故郷（秋田県鹿角市）の郷土史研究会の方々が、関西大学図書館内藤文庫所蔵の湖南の青年期書簡と故郷に残っている書簡とをリンクして解読作業を行ったうえで『内藤湖南・十湾書簡集』（十湾は湖南の父）を刊行しようとしたが、長い間許可を得られず、その苦情が様々なチャンネルを通じて湖南研究者の私の耳にも入ってきました。この懸案事項はようやく内田館長時代で解決され、念願の公刊が二〇一六年内藤湖南生誕一五〇周年という目出度いタイミングで実現できました。このような開かれた心を持つておられるからこそ、館長任期が終わった翌二〇一七年以降、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長としてリーダーシップを發揮されたのです。「名副其實」の最適任者と言えましょう。

井上先生のご専門分野は古典小説を中心とする近世の「白話文学」で、趣味の一つは日本の文学全集精読と全国の文学記念館探訪、一年に数度、白話文学作品に関する各種の読書会を開催していると自己紹介されたことがあります（大学の内部広報冊子『先生の横顔』二〇一八年度版）。お互いの個人研究室が近接していたこともあり、私はよく先生をお邪魔して、多くのことについて有難いご教示をいただきました。先生が多くの文学記念館関係の図録をもつておられることは、二〇一六年になってはじめて知りました。同年度の日本思想史学会年次大会の本学での開催責任者として、私は泊園記念会会長吾妻重二教授と相談し、大学創立一三〇周年という機会をとらえて関西大学図書館の展

示室で泊園文庫・内藤文庫・増田文庫に所蔵されている日中文化交流研究の資料を陳列し、年次大会参加者の見学のために便宜提供しようとするプランを立てました。そのため、展示物のキャプションをつくる必要がありました。晩年本学教授をつとめられた故増田渉先生のことを伺いたく、井上先生の研究室を訪ねてみたら、先生はその場で書架から『海を越えた友情——増田渉と魯迅』と題する鹿島歴史民俗資料館（島根県松江市）の図録を取り出して手渡ししてくれました。中国の文豪魯迅と特別な友誼を結んだ中国文学者増田は鹿島町出身ということで、同資料館におけるエネルギーを投入して作った立派な図録です。そのお蔭で関連展示物のキャプションだけでなく、展示図録における詳細な説明文を作成することもでき、充実した展示となりました。

先生主催の読書会は合同研究室や合宿先の大学セミナーハウスで開催されることがしばしばであり、その内容の濃さと頻度の高さは中文教室のなかでは「有口皆碑」という定評ある課外活動となっています。私のゼミ合宿と重なったことが二度あり、一度は彦根荘における偶然の邂逅で、いま一度は六甲山荘で合同開催した発表会でありました。先生の門下生の発表は筋立てが良く内容も充実しており、そこから学生たちに対する先生の深い愛情と強い責任感、次世代研究者の育成を自分の生き甲斐と考える先生の人生観が窺えます。先生が高弟たちの協力を得て成し遂げた最大の偉業は、章培恒先生等が主編する『中国文学史新著』の日本語訳（上巻の共訳者は林雅清氏、中巻は後藤裕也氏、下巻は四方美智子氏）です。上巻が出版された二か月後の二〇一一年五月三日に、復旦大学が同書の出版にちなんだ中国文学史の外国語訳に関する大型国際シンポジウムを開催しました。その盛況は、翌日の復旦文化新聞網による次の報道により知ることができます。

复旦大学杰出教授章培恒先生等主编的《中国文学史新著》日译本第一卷近日由日本关西大学出版社出版，这是建国以来大型中国文学史著作首次被译介到国外。日文版由日本关西大学资深汉学家井上泰山教授率领的团队进行翻译在日本出版。

5月3日、《中国文学史新著》日译本第一卷出版暨中国文学史外译国际研讨会在复旦大学举行。本次会议以《中国文学史新著》的日译本第一卷出版为契机、邀请包括井上泰山教授在内的日本・韩国・美国以及香港・大陆的著名学者、文学史著译家汇聚上海、共同探讨东亚、欧美翻译及撰著中国文学史的历史与现状、译介中国文学史的选择标准、翻译路径与原则以及中国文学史外译的前景等话题。

しかし、井上先生にとって、これが中国で特別な光栄を得た最初のものではありません。それより四年前の二〇〇七年五月十日に、先生の三国演義研究も同書愛好者の多い中国でセンセーションを巻き起こしました。その媒介者もやはり章教授でありました。当時の『東方早報』に「井上泰山…就这样成为「三国」俘虏」と題する熱のこもった記事が掲載されていました。

应复旦大学古籍整理研究所所长章培恒教授之邀、日本著名私立关西大学的井上泰山教授前天在复旦开讲系列讲座《〈三国演义〉与日本文化》。作为日本当代研究《〈三国演义〉》的重要学者、《〈三国演义〉》重要版本叶逢春版《三国志通俗演义史传》的发现者和翻刻版的出版者、井上泰山将把自己和《〈三国演义〉》的缘分渊源以及《〈三国演义〉》对日本文化的影响在四次讲座中娓娓道来。井上泰山自嘲作为不是出身于书香世家的学者、自己直到大学才通

读了《三国演义》、这个时间比一般日本人晚、但是却马上成了它的俘虏。

(中略)

章培恒对于日本学界的《三国演义》研究给予了高度的评介，并总结了出了两个特点。首先，对于新发现的材料的研究比中国学界花力气。第二，重视版本的研究，并注重分析外国文化对中国传统通俗小说的影响。

5月10日、15日、16日，井上泰山将继续在复旦就在西班牙发现叶逢春本《三国志通俗演义史传》的经历以及自江戸时代以来《三国演义》在日本学界和民间造成的影响作进一步介绍。

考えてみれば、井上先生と章先生の友情は、ある意味で増田涉と魯迅との友情に類比できる部分があるだろうと言えます。前者は日中戦争の前夜に形成されたものの一つであり、後者は平和と国際化の時代に形成されたものの一つであるとはいえ、いずれも異国の文学研究者の個人間の真摯な友情を示す感動的な物語であります。そして、中国人としての私は幸いにも、後者の由緒を知る機会を与えられたのです。

すなわち章培恒先生が神戸大学外国人教師として初来日したのは中国の改革開放直後の一九七九年に遡ります。一九八〇年代も時折日本を訪れて集中講義や講演を行い、日本の中国文学研究界で大好評を博しました。一九八六年に関大に着任された井上先生はその前後より、章先生の人と学問を慕うファンになったに違いありません。復旦大学講師として同年より大阪大学大学院博士後期課程に留学しはじめた私も、よく章先生に関する噂を聞きました。その二〇〇六年に関西大学創立一二〇年記念国際シンポジウムが開催されますが、組織者の藤田高夫教授よりなんと破天荒な使命を与えられました。それは、上海に行つて招聘予定の復旦大学所属のパネリスト二人、章培恒先生

と周振鶴先生を迎えてこいという「奉迎使」・「接伴使」の仕事でありました。私の渡航予定を知った井上先生は、章先生に差し上げてほしいと、わざわざ「一大瓶（一八〇〇ミリリットル）」を私のところに運んで来られました。私は井上先生の依頼どおり実行しましたが、章先生に指示された手渡し場所は想定外のバンドに面する高級ホテルの高層レストランでありました。多忙な章先生が、北京より来訪する中国社会科学院文学研究所のシニア研究員と私を共に豪華なご馳走に招待してくださったのです。その時の収穫は、美味しい料理やバンドの夜景を楽しむことというよりも、弾みのあるお二人の大先生の懐旧談を横で拝聴することでありました。一九七九年「中国文学研究者訪華団」团长を務めた故吉川幸次郎先生の一行が三週間にわたり唐詩ゆかりの名所旧跡を巡りましたが、そのシニア研究員は、一行の同伴者と案内者であったため、話題は当時の風景や逸聞に及びました。この珍しいお話を聞いたのも、ひとえに井上先生のお蔭であったといまでも思っています。

ところで、上記する井上先生の三国研究に対する章先生の二つの高い評価は取りも直さず、内田先生が開発した「周縁アプローチ」による中国語学研究にも当て嵌まると思います。すなわち、日本人研究者は新しく発見された資料の研究に投入する精力が中国人研究者のそれより大きいこと、および中国伝統的言語文学に対する外国文化の影響に力を置いて深く掘り下げて研究することにあります。

内田先生が行った招待講演の回数は相当多いですが、その一つは「老輔仁」（一九四九年建国前の北京に存在していたミッション系の輔仁大学、台湾では同名の大学がいまでも存続している）の伝統を一部継承している北京師範大学の名高い「跨文化研究院」でなされた「文化交流学与语言接触研究」と題するものであります。事後の総括報道は次のように高く評価しています。

本次讲座的首讲《文化交涉学与语言接触研究》、由北师大跨文化研究院院长董晓萍教授主持。2019年8月21日上午日本关西大学东亚研究科教授、关西大学开放式亚洲文化研究中心主任内田庆市教授、在北师大教九楼201教室、为跨文化化学研究生国际课程班的师生做了他本次讲座的首讲了。

个案一、《伊索寓言》在西学东渐时期的汉译与传播。

个案二、圣像画。

内田教授研究所体现出的扎实的材料功底、严谨的论证方式与对理论方法不断创新的探索、展现出东亚跨文化研究学者在自身学术传统基础上与国际多元文化沟通的风貌、其理论与个案也引发学员们的不断思考。

約百年前、青木正児が中国文学研究に従事する近代の日本人学者の心理を次のように鋭く分析したことがあります。

或る一国の文学を研究する上に、外国人が本国人に対して劣等感を抱かしめられるのは已むを得ぬ所である。外国文学の紹介、啓蒙的老婆心に満足するならば至極平穩無事に済まう。然し多少とも生き甲斐のある善意の野心に燃ゆる時、外国文学研究者は物を想はしめられるであらう。欧洲文学研究者はいざ知らず、明治以来、支那文学研究の先輩達は、その野心を欧洲先進国の文化より教られた新しき研究法及び着眼点を活用することに由つて、支那の学者に対して機先を制し、一日の長を示して来た。

内田先生と井上先生のケースは、いずれもここで指摘された近代の日本人学者の研究の特質を反映していますが、



講演当日の内田教授と北京師範大学董曉萍教授（真ん中）との歓談風景



井上泰山教授による章培恒教授ご著書第一巻の日本語訳が国際シンポジウムの会場で展示されている模様

同時に、二十一世紀というグローバル化の時代の新しい特色も帯びております。お二人の先生が開拓した研究方法をいかに継承しさらに発展させるべきかは、本会の会員たちにとって今後の大きな課題となるに違いありません。

